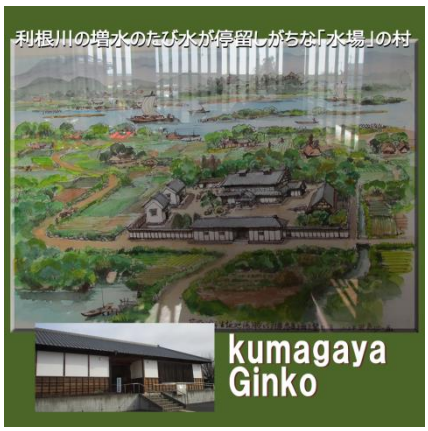
荻野吟子の世界

イントロ

妻沼には国宝「歓喜院聖天堂」をはじめ多くの文化財や建築物があり、時代を超えて継承されてきた歴史や独特の文化があります。そうした妻沼の歴史の中で、俵瀬の地に生まれた「荻野吟子」が放ち続ける光はとても大きい存在です。彼女の人生が利根川を前にした妻沼の地から始まり、その時代の苦難に奔放され続け、それでも決してあきらめずに”日本初の女医”となりました。このことは熊谷の誇りとして広く語り続けていくことでしょう。



若き吟子が経験した利根の冬。寒冷な冬の利根川と吟子の熱き生命が密着に関わり合う。冬には赤城山からの寒冷な”赤城おろし”が吹き付ける。夏は豪雨なよる洪水にさいなまれる”水場の地”であったこと。このような自然の特徴が吟子の生命と強い精神力を育てたのでしょう。冬を乗り越え、春になると熊谷の俵瀬の土手沿いには無数の菜の花が咲きます。対岸を眺めると群馬の春めいた風景があります。赤城おろしが止み春の彩りを感受する、利根の恵みです。

『荻野吟子の歩み』

荻野吟子は、江戸時代末期の 1851 年（嘉永 4）3 月 3 日、利根川近くの幡羅郡俵瀬村(現在の熊谷市俵瀬)に生まれました。幼少から才女として知られ、若くして結婚するも予期せぬ病を発症し離婚。この治療の体験により女医の必要性を痛感し、医師になることを決意しました。吟子は妻沼の「両宜塾」の松本萬年に師事し、熊谷近郊に画室を構えた女流画家の奥原晴湖の影響を受けました。上京した後、東京女子師範学校で学び、私立医学校「好寿院」を優秀な成績で卒業しました。**女性が医学を修め医師となる道が閉ざされていた中で、意義深い一歩を踏み出した。**1885(明治 18)年、吟子は旧来の制度など多くの障壁を乗り越え、医術開業試験を受験し合格。**日本公許登録女医第 1 号**となり、東京の本郷湯島で開業しました。吟子の努力が女性医師の道を切り開き、近代日本に一つの美しい花を咲かせた瞬間だった。吟子は医療に留まらず、キリスト教の活動や女性の社会進出を目指す運動に力を注ぎました。志方之善と結婚し、夫と共にキリスト教徒の理想郷建設のために北海道へ移住。地域の医療を進めたが、夫の病死など

過酷な運命にも直面した。晩年は東京に戻り、穏やかな目線で患者と向かい続け、1913(大正 2)年に激動の一生を終えた。

俵瀬の「荻野吟子生誕の地」には石碑や銅像が建立され、近隣には吟子の資料を展示した「荻野吟子記念館」と史跡公園が整備されています。吟子の誕生日を過ぎるころには「吟子桜」と名付けられた早咲きの河津桜が花開く。吟子は「人その友のために己の命を捨つる、これに大いなる愛はなし」という『ヨハネによる復音書』の聖句を愛した。吟子の大いなる愛は薄紅色の花とともに、希望に満ちた春の到来を待ち望んでいる。

2019.熊谷ルネサンスより引用。

現在の熊谷市俵瀬に生まれた荻野吟子。その生涯は渡辺淳一の小説「花埋み（はなうずみ）」などで広く世に紹介されています。昭和 46 年には「荻野吟子生誕之地」(俵瀬 580)が指定記念物史跡に指定され、平成 18 年 5 月には、生誕の地に荻野吟子記念館がオープンしています

荻野吟子の年譜

1851 年 荻野吟子誕生

嘉永４年（1851）３月３日、幡羅郡俵瀬村（現熊谷市） に生まれる。

① 誕生

吟子は、嘉永 4 年（1851）3 月 3 日、幡羅郡俵瀬村（現熊 谷市俵瀬）の名主、荻野綾三郎・嘉与の五女「ぎん」として生まれました。荻野家は、俵瀬村の名主として村運 営の中心を担った家で、**長屋門**を構えた豪壮な家でした。 この俵瀬村は、北に流れる利根川には堤がなく、南に は中条堤がそびえ、利根川の増水のたびに水が滞留しがちな「水場」の村でした。 吟子は、幼いころから聡明で、勉強好きであったといわれています。俵瀬村の隣、 和田村（現熊谷市 和田）の**大龍寺**には、北条察源が行余書院という寺子屋を開設しており、吟子が学んだ可能性があります。

長屋門(俵瀬村)

大龍寺

慶応４年（1868）埼玉郡上川上村（現熊谷市）の名主･稲村貫一郎と結婚。

明治３年（1870）病気で協議離婚（19 歳）、大学東校附属病院に約 2 年間入院。女医を目指す契機となる。

退院後、寺門静軒の「両宜塾」を継承した松本万年に師事。

② 最初の結婚

慶応 4 年（1868）、吟子が 17 歳になる年に、埼玉郡上川上村（現熊谷市上川上）の名主稲村家の長男、貫一郎に嫁ぐことになりました。稲村家は、古河藩領であった上川上村の運営を担った家で、この地域では有数の豪農でした。吟子が嫁いだ当時、古河藩士を父に持ち、日本を代表する**女流南画家・奥原晴湖**が、戊辰戦争の難を逃れるため、

稲村家に仮寓していました。晴湖との出会いは、吟子の人生に大きな影響を与えたようで、吟子は上京時に、晴湖のように男装したとも伝えられます。貫一郎は、熊谷のために多くの功績を挙げた人物です。少年の頃、古河藩に遊学し、若くして名主役を務めています。明治 8 年（1875）に結成された埼玉県初の政治的社交団体「七名社」の構成メンバーとなり、明治 17 年（1884）には、埼玉県会副議長を務めています。銀行の創設・経営や牧畜牛乳販売の開業など、実業家としても大成しています。また、地元の農家のために、「やなぎごおり」の普及にも励みました。吟子と貫一郎の結婚は、長くは続きませんでした。吟子が病気にかかり、 実家での療養を余儀なくされたのです。そして、明治 3 年（1870）、協議離婚となりました。貫一郎は、その後も吟子への援助を続けたといわれて います。

③ 入院と女医への決意

吟子は、大学東校（後の東京大学医学部）の付属病院に入院することになりました。生死をさまようほどの病状となり、約 2 年間の入院を余儀なくされました。やや回復し、同じ女性患者を励ます際、男性の医師に診察される経験に羞恥と屈辱を覚えることに共感し、これが嫌で受診せず、命を落とす女性さえいることを嘆きます。女医の必要性を痛感し、吟子自身が女医となる決意をしたのでした。

両宜塾　妻沼両宜塾に入門

故郷に戻った吟子は、本格的に学問を始めます。まず、幕末の著名な儒学者・寺門静軒が妻沼村（現熊谷市妻沼）において開塾した**両宜塾**に入門します。吟子は、静軒の後を継いだ松本万年の教えを受けました。松本万年は、静軒に漢学を学び、医業も修めました。また、吟子をはじめ、深谷宿（現深谷市）出身の公許女医 2 号・生沢クノなどの師であり、女子教育に力を注いだ人物でした。両宜塾では万年の長女荻江も教えていましたが、吟子と荻江は深く親交を結び、 義姉妹の契りを交わしたと伝えられます。

④ **女子教育**　女子教育の道へ

■上京して井上塾に入門。東京師範学校卒業。

明治６年（1873）上京。国学者・井上頼の神習舎に入門（22 歳）。

明治７年（1874）内藤満寿子の甲府女学塾に助教として招かれ、甲府に赴く（23 歳）。

明治６年（1873）に父綾三郎が亡くなると、さらに学問を修めるため 22 歳で上京します。まず、国学者であり、かつ皇漢医である**井上頼の私塾神習舎**に入ります。頼は、後に国学の大家となる人物です。吟子の和歌の力は師も越えると称されるほどに、高い教養を身につけています。その翌年には、**甲府に女性私塾**の設立を目指していた内藤満寿子の求めにより、助教として、同じく井上門下であった年下の田中かく子とともに甲府に赴きますが、満寿子が病気となったため休校となり、吟子は再び東京に戻ります。この後も、松本荻江や井上頼 、内藤満寿子、 田中かく子とは、生涯を通じて長くつきあいが続きます。

女子高等師範学校で学ぶ

明治８年（1875）女子高等師範学校に入学（24 歳）、 12 年 7 月同校を卒業（28 歳）。

この頃、初めて女性の教員養成を目的とした学校である**女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）**が設立 されます。吟子は、この学校で学ぶことを選び、第１期生として合格します。このとき、松本荻江は、この学校の訓導（教授）を勤めていました。明治 8 年（1875）11 月、皇后を迎えて開校式が行われ、第１回生 74 名の学校生活が始まりました。教科内容は、地理・歴史・物理・化学・数学・博物学・経済学・教育論・簿記法・養生法・唱歌・体操等多岐にわたっていました。吟子の成績は優秀で、寄宿舎の寮長を務めたといいます。 この学校を卒業するのは難しく、第１回入学者 74 名のうち、第１回目の試験で卒業できたのは 15 名でした。吟子は、おそらく病で帰郷せざるを得ず、試験を受けることができませんでした。**半年後の明治 12 年（1879）7 月 10 日、28 歳の吟子は、第２回目の試験で卒業しています。このとき卒業できたのは、わずか 18 名でした。**

好寿院

明治 12 年（1879）私立医学校の好寿院に入学、15 年優秀な成績で卒業（31 歳）。

■女人禁制ということで、いずれも断られた。しかし、更に努力の結果、**私立医学校「好寿院」**が受け入れてくれることとなった。好寿院の課程を修了した。

⑤ 医術を学ぶ

卒業にあたって、女子高等師範学校幹事の永井久一郎教授との面談の際、吟子は女医を目指していることを明らかにします。永井は医学校への女子の入学が難しいことを知っていましたが、彼女の意志が固いことをみて、後に陸軍軍医総監や赤十字社長となる医学界の重鎮石黒忠悳を紹介しました。吟子は、自分の考えをまとめたものを携えて、石黒と面会します。石黒は吟子のために尽力し、知人の宮内省侍医・高階経徳が経営している医学校好寿院への入学が許可されました。当時、吟子のほかに 5 ～ 6 人の女性が通っていたとのことですが、吟子のほかは辞めてしまいました。 吟子は、この学校に通いながら、豪商高島嘉右衛門や海軍兵学校教官、農商務省書記官家の家庭教師や教育顧問も勤めています。これらの家庭と学校までは１里（約４km）近くもありましたが、吟子は学業のかたわら通い続けました。こうして３年間の修学を終え、明治 15 年（1882）、優秀な成績で**好寿院**を卒業しました。しかし、卒業後が正念場でした。当時の医師制度の下では、私立の医学校卒業生は、 政府の行う医術開業試験に合格しなければ、正規の医師となることができなかったのです。対して、官公立医学校を卒業した者や外国の医学校を卒業した者は、その卒業証書を提出して請願すれば認可が下りるという制度でした。特に、今まで女性で医術開業試験を受けることができた者は皆無でした。これから鉄の扉を開けるべく吟子の果敢な挑戦が始まるのでした。

医術開業試験

明治 15 年（1882）東京府に医術開業試験の願書を提出したが却下。翌年、東京都・埼 玉県に提出したが却下内務省に請願書を提出するが却下。

⑥ 不屈の請願

吟子は明治 15 年（1882）６月、東京府に医術開業試験の願書を提出しましたが、８月に却下されました。翌 16 年、再び願書を提出しますがこれも却下、９月に今度は埼玉県に提出しますが却下、内務省にも提出しますが、これも却下されたのです。こうした苦境の中でも吟子はあきらめず、各地の医師の助手について実地の腕

も磨いていましたが、日本で受け入れられなければ海外に行くことを考えていたほど、進退は窮まっていました。 吟子は、石黒忠悳のもとを訪れ、助けを求めます。石黒は、内務省衛生局長 の長与専斎に面会して状況を伝えました。当時、衛生局が医師制度を策定していました。石黒は、「女が医者になってはいけない」という条文がない以上は、 受けさせて及第すれば開業させるべきではないかとかけあいました。高島嘉右 衛門も吟子を助けます。長与と会うための紹介状を吟子に渡しますが、このとき、井上頼に頼んで、日本の古代にも女医がいた文献（『令義解』）があることを資料にし、紹介状に添えたともいわれています。吟子はついに長与と会いますが、長与は、医学を修得しているのだから受験を許可してもよいとの考えでした。ようやく、女性の受験が認められたのでした。

⑦ 女医への遠い道

吟子が医師を目指していた当時、多くの女性が同じように医師を目指していました。女医第２号の生沢クノをはじめ、多くの女性が医術開業試験を受験すべく活動を行っていました。吟子が願書を提出する以前、明治 11 年（1878）には東京府から、14 年（1881）には長崎県から、内務省に女性の受験についての問い合わせが行われています。こうした活動の中で、吟子は重要な役割を果たしたと考えられます。まず、吟子 はすでに医学校の好寿院を卒業しており、たしかな医学を身につけていました。また、これまでの人生で培った文化人としての豊かな教養と人脈は、大きな力と なりました。吟子には、石黒忠悳や高島嘉右衛門ら当時の大物との繋がりがあり、 これらの人脈を活かして衛生局長の長与専斎に直接会うことにも成功しています。しかし、後に生沢クノが語っているように、女医への道は、吟子だけでなく、多くの女性たちの努力によって切り拓かれたものだったのです。

明治 17 年（1884）医術開業受験が許可され、9 月前 期試験に合格。翌年 3 月後期試験 にも合格、女医第１となる（34 歳）。5 月本郷湯島（現文京区）に医院開業し、後に下谷（現台東区）に移る。

■明治 17 年 9 月の前期試験に受験し、 女性受験者 4 名のうち、吟子がただ 1 人合格したのである。

■そして、翌年３月には難関とされる後期試験にも見事合格したのであった。

日本最初の女医の誕生

■女医第一号はこのようにして誕生したのである。

⑧ 日本最初の女医の誕生

吟子をはじめとして、女医を目指す女性たちやその周辺の人々の尽力により、明治 17 年（1884）の内務省医術開業試験では、女性からの願書がついに受理されました。この試験は前期と後期とがあり、9 月 3 日に行われた前期試験の女性の受験者は、荻野吟子・木村秀子・ 松浦さと子・岡田みす子の 4 人でした。試験科目は、物理学・化学・生理学・解剖学です。吟子は、すでに女子高等師範学校で学び、さらに好寿院で本格的な医学を学んでいました。これに加えて、必死に受験 勉強をしていたことにより、女性で唯一の合格を勝ち取りました。 次いで、後期試験が翌 18 年 3 月（1885）に行われました。内科学・外科学・産科学・眼科学・薬物学・臨 床実験の専門科目でしたが、周囲の注目が集まる中でこれにも 合格、医籍登録され、ここに日本最初の公認された女医、

当時の熊谷駅

荻野吟子が誕生したのです。吟子はこの時、34 歳でした。この後期 試験は、132 人が受験して、合格者はわずか 24 人という非常に厳しいものでした。

しかし、後期試験に合格したそのすぐ後に、吟子は母危篤の通知を受け、故郷俵瀬に駆けつけました。そして、母の死と向き合いました。この 2 年前には高崎線が開通しており、これに乗って故郷に帰ったのでしょう。

⑨ 荻野医院の開設

吟子に、悲しみにくれている時間はありませんでした。母を亡くしたその翌月には、本郷三組町（現文京区）に**「産婦人科 荻野医院」**の看板を掲げました。新聞・雑誌は、この日本最初の女医の誕生を報道しました。患者は日に日に増えて、やがて下谷西黒門町（現台東区）の 2 階建ての大きな家に移りました。そこでも大盛況でした。この荻野医院には、若い女医の卵をはじめ多くの女性が寄宿していました。女子教育に奔走していた松本荻江も一時寄宿しています。

⑩ **吟子スタイル** 鹿鳴館スタイルの吟子

最もよく使われる吟子の写真は、（後世に写真に色を塗ったもの）にもなっているものですが、熊谷の小暮写真館で撮影されたもので、当時流行していた鹿鳴館スタイルの服装です。医師になってまもない頃の吟子を撮った ものでしょう。鹿鳴館は、明治 16 年（1883）、政府の条約改正のための欧化政策により、東京・日比谷に造られた 社交場です。夜会服にボンネット（帽子）が当時の流行スタイルでした。吟子もこれを取り入れました。ここに、現在でも多くの人が親しんでいる吟子像ができあがりました。

キリスト教信者

明治 19 年（1886） この頃、本郷教会にて洗礼を受け、 東京婦人矯風会に参加（35 歳）、後に風俗部長となる。

明治 20 年（1887）大日本婦人衛生会を設立。翌々年、 明治女学校教師・校医となる。

⑪ キリスト教入信と社会運動

この頃、吟子は、本郷教会で海老名弾正牧師から洗礼を受けました。吟子は熱心なキリスト教信者となっていきますが、このことが人生に大きく影響を与えました。明治 19 年（1886）には、当時の女性社会運動の中心であった東京婦人矯風会（後の日本キリスト教婦人矯風会）に入会し、その後、風俗部長となりました。特に廃娼運動に熱心に取り組み、大演説会を開催しています。 このほかにも、吟子は女性の権利を向上させるため、先頭に立って活動を行っていました。明治 20 年（1887）には、大日本婦人衛生会を設立しています。これは、日常家庭の女性の役割を積極的に位置づけすることを目的とし、衣・食・住や育児など様々な分野での啓発活動を行っています。明治 23 年（1890）には、衆議院の婦人傍聴禁止の撤回運動に参画し、撤回を勝ち取っています。 また、女子教育に大きく影響を与えた巌本善治の招きで明治女学校の生理・衛生の講師ならびに校医になっています。さらに、当時、女医の必要性についての議論が盛んに行われていましたが、明治 25 年（1892）に論文を発表し、女医の必要性、ならびに大学の女子への門戸開放と医学部を備えた女子大学の設立を訴えています。 明治 24 年（1891）に起きた岐阜県を震源とする濃尾大地震では、女子の孤児を保護す るために立ち上がった石井亮一（日本の知的障害児教育の創始者）に賛同し、荻野医院を子供たちのために開放、自らも孤児たちの世話を行いました。

==========コラム==========

光恩寺(千代田

利根川をはさんだ荻野吟子の生家とその対岸にある**光恩寺**は昔は舟で行き来ができていた（今でもここに渡船場があり実際に行き来ができる・・県道なので無料という？）光恩寺に荻野吟子の生家屋敷門がなぜ移築されたかは明白な記録はないが、明治２３年（１８９０）の境内図にも描かれており、それ以前に移されたようだと書かれている。

インマヌエル

明治 23 年（1890）議会の婦人傍聴禁止撤回運動に参画。11 月熊本県の志方之善と結婚する（39 歳）。

⑫ 第二の結婚

明治 23 年（1890）、同志社出身のキリスト教伝導に燃える 1 人の青年、志方之善が荻野医院を訪れます。2 人は意気投合し、結婚することを決意します。公許女医第 1 号で社会的にも活躍する吟子と、一介の青年でしかない 15 歳年下の之善との結婚を周囲はこぞって大反対しました。しかし、2 人の決意は固く、その年の 11 月 25 日、之善の故郷、熊本県山鹿郡来民町（現山鹿市）の生家で結婚式が行われました。このとき、吟子 39 歳、之善 26 歳でした。**之善には、キリスト教徒による理想郷を建設するという夢がありました。** 吟子もこの夢に大きく共感し、行動をともにすることになります。行動力に優れる之善は、翌年 5 月には吟子を東京に残して北海道に渡り、衆議院議員・犬養毅らが権利を持っていた国有未開地のうち、瀬棚郡利別原野の 200 町歩の貸付地を得ます。そして、キリスト教徒の同志たちと、理想郷を建設するために未開地の開拓を始めます。一方、吟子自身は、明治女学校の舎監となり、居を学校内に移しました。荻野医院は、石井亮一に提供しています。石井は、孤児たちの施設「聖三一孤女学院」を創設しました。

明治 27 年（1894）北海道のインマヌエル（現今金町神丘）に入植、夫とともにキリスト教による理想郷建設を目指す。

明治 29 年（1896）夫及び夫の姉の子トミと国縫に転 居。翌年、トミを養女とする。

明治 30 年（1897）瀬棚村（現せたな町）に移り、医院開業。この頃、淑徳婦人会や日曜学校を創設。

⑬ 北海道へ渡る

インマヌエル教会

之善らの開拓事業は、未開の荒野を一から開墾する非常に過酷なものでした。彼らは、この地を新約聖書中の「神と共にいる」という意味のインマヌエル（現今金町神丘）と名付け、仲間を集めました。之善が属する組合派の信徒だけではなく、**明治 26 年（1893）には、長井村田島（現熊谷市田島）の信徒天沼恒三郎ら聖公会の一行が入植しています。 明治 27 年（1894）、吟子も北海道に渡り、インマヌエルに入ります。**明治女学校時代の同僚の手記によれば、吟子がこの開拓事業にたいへんな情熱を持っていたことがうかがえます。インマヌエルでは、之善の姉の夫が亡くなったため、その子トミを預かり、やがて養子にしています。しかし、明治 29 年（1896）、之善と吟子は、インマヌエルを撤退して国縫（現山越郡長万部町）に向かいます。インマヌエルの開拓は、それなりに軌道に乗っていましたが、協会派と組合派の対立に加え、成功地以外の貸付地の返還を命じられたことからキリスト教徒以外の入植者も入るようになり、理想郷建設が目的の之善には困難な状況になっていました。吟子は、

せたな町のシンボル

国縫で医院を開業していたとも伝わります。明治 30 年（1897）には、ニシン漁で賑わう瀬棚村（現せたな町）に移りました。村内の会津町に家を借り、婦人科・小児科医院を開業しました。瀬棚では、 町の有力者の妻たちと淑徳婦人会を結成して社会活動を行っていました。さらに、日曜学校を創設、信仰の普及に努めました。

==========コラム==========

波瀾万丈の晩年

荻野吟子顕彰碑

志方は北海道の原野を切り開いてキリスト教の理想郷を作る夢を抱き、同志と共に瀬棚の奥地に入植した。瀬棚は江差より北の日本海側の、当時はニシン漁などで生計を立てる漁村であったようだが、現在でも交通の不便なところである。そのまた奥に入った原野を切り拓いて、神の丘を建設するという。 明治 29 年（1896）に吟子も北海道へ渡った。志方は同志社に再入学して神学を学び、北海道に戻って浦河教会の牧師になるなど、吟子とは別居の生活が続いた。吟子は瀬棚町や札幌で医院を開業したが、志方が明治 38 年に 42 歳で亡くなったため、東京に戻った。 荻野吟子が志方と結婚をせずに東京で医療活動や社会貢献活動を続けたなら、更に大きく飛躍しただろうとの見方がある。荻野吟子の生涯は 2 度の結婚ともに波瀾に満ちたものであった。

昭和 42 年、北海道百年を記念して瀬棚町に荻野吟子顕彰碑が建てられた。荻野吟子生誕 150 年の平成 13 年には荻野吟子小公園が整備された。これに刺激されて、吟子の出身地熊谷市も生家の地に荻野吟子史跡公園を整備し、平成 18 年に記念館がオープンした。

==========

明治 37 年（1904）大病にて熊谷の姉友子のもとで療養（53 歳）

明治 38 年（1905）一度回復し在京するも再び大病、 7 月瀬棚に戻る。9 月之善が死去。

⑭ 夫之善の死

明治 36 年（1903）、之善は京都の同志社に再入学するため北海道を離れました。吟子は、札幌での開業も目指していたようですが、実現したかは分かりません。明治 37 年（1904）、大病を患い熊谷の姉友子のもとで療養しています。一時回復するものの再び病に伏せます。

明治 38 年（1905）、伝導のため之善が北海道に戻り、さらに瀬棚に帰ると、吟子も無理を押して瀬棚に戻ります。しかし、今度は、志方が病を患い、同年 9 月 23 日、会津町の自宅で亡くなりました。享年 41 歳、吟子が 54 歳のときでした。之善の墓は、インマヌエルに建てられました。

明治 41 年（1908）帰京し、本所区新小梅町（現墨田 区）に開業（57 歳）

大正 2 年（1913） 6 月 23 日死去（62 歳）、本郷教会（文 京区）にて葬儀、墓地は雑司ヶ谷霊園（豊島区）

⑮ 吟子の上京と死

吟子は、姉友子の勧めにより、明治 41 年（1908）に再び東京に戻りました。本所区新小梅町（現墨田区）にて医院を経営し、9 つ年上の姉友子と養女トミと暮らしました。医院はあまりはやらなかったようですが、多くの親戚や友人に囲まれて穏やかな日々を送りました。大正２年（1913）３月、吟子は卒倒し、そのまま病床に伏せました。その後、 5 月に脳卒中で倒れ、ついに回復せず、6 月 23 日、友子やトミ、親戚に看取られて波乱多き一生を閉じました。62 歳でした。葬儀は、2 日後の 25 日、本郷教会で行われ、親戚・友人や吟子を尊敬する若き女医たち ら 50～60 名が見送りました。墓は、雑司ヶ谷霊園に建てられています。

以上

資料提供・作成協力：今金町教育委員会・埼玉県教育委員会・せたな町教育委員会・滝乃川学園・深谷市

==========荻野吟子生誕の地・荻野吟子記念==========

荻野吟子は埼玉ゆかりの三偉人のひとりです。たゆまぬ努力の結果、日本で初めて公許登録女医となった荻野吟子、自らの障害を乗り越え、群書類従の編纂などを行った塙保己一、企業の育成や社会事業に尽力し、近代日本経済の礎を築いた渋沢栄一。

名称：荻野吟子生誕の地・荻野吟子記念館

住所：埼玉県熊谷市俵瀬５８１番地１

生誕の地には「荻野吟子女史像」があります。

その波乱に富んだ生涯が直木賞作家・渡辺淳一の小説「花埋み」、ＮＨＫテレビ「風雪」や舞台「命燃えて」で広く世に紹介され、その愛と不屈の根性を慕って、利根川の堤防下に建つ「荻野吟子生誕之地史跡公園」を訪れる人があとを絶ちません。

この偉大なる功績は我国医学界において永遠に燦然（さんぜん）と輝き続けるものである。又、偉大なる吟子女史が開業し、その傍（かたわ）ら婦人運動やキリスト教の布教などに活躍されたせたな町は、町民あげてこれを誇りとし、その業績を讃えるものである。

人権に尽くした人たち 荻野 吟子 ～

日本の女医第１号（最終回）

https://www.jinken-net.com/gozonji/information/1210.html

道の駅めぬま

星に　▲荻野吟子とバラ（道の駅めぬまの銅像）

吟子は生前「人その友の為に、己の命をすつるは、此れより大なる愛はなし」という言葉を大切にして行動し、女医の門戸を開き、また女性の地位向上に貢献しました。こうした吟子の功績に対し、1984（昭和 59）年、公許女医誕生 100 年記念式典が開催され、（社）日本女医会は、社会貢献などの功績や僻遠の地での医療に従事した女医に贈る賞として、「荻野吟子賞」を制定しました。また、故郷の埼玉県では吟子を埼玉県 3 大偉人の 1 人としてその功績を称えています。

2008（平成 20）年 3 月 20 日、吟子は星になりました。その星は、熊谷市の天文同好会の方が発見した小惑星で、火星と木星の間の軌道を回っています。星の名前を付けるのに当たり、熊谷市が市町村合併後の新しい市に相応しい名前を募集したところ、多数の応募の中から「荻野吟子」が選ばれたのです。夜空を見上げると、皆さんも吟子と出会えるかもしれません。

河津桜（吟子桜）が見頃を迎えています！！日本の女医第一号の荻野吟子女史の生誕地で
荻野吟子女史の誕生日 3 月 3 日頃から咲き始めますので当地では吟子桜と呼んでおります

荻野吟子の生涯を描いた映画制作が発表されました。株式会社現代ぷろだくしょんが、2018 年 9 月 4 日に「荻野吟子の生涯～日本ではじめての女性医師」（仮題）とのタイトルの WEB サイトを公開し、制作スケジュールなどが発表されました。

私は映画のプロデューサーであり映画監督もしています山田火砂子と申します。現在は埼玉県の三大偉人である荻野吟子の映画を製作しようとがんばっております。吟子は日本国家が認めた初めての女医で有ります。

http://www.gendaipro.jp/ginko/#schedule

■荻野吟子の生涯　映画化へ

WEBサイトのトップページより

株式会社現代ぷろだくしょんが、「荻野吟子の生涯～日本ではじめての女性医師」（仮題）のタイトルで映画制作を発表しました。
そのスケジュールは、年内にキャスティングの決定。2019年春ごろから撮影開始、初夏には完成予定としています。
現代ぷろだくしょんは、社会に対して強いメッセージを訴えかける作品が多く、文部科学省、厚生労働省、全国PTA協議会などの公的団体が推薦。今回の作品への期待も高く、既に、多くの団体が推奨しています。

既に妻沼地域においては、その制作支援の活動が始まり、熊谷フィルムコミッション活動の充実、旧坂田医院の活用など、熊谷市の映画制作支援に大きな期待が寄せられています。
詳しい内容は、WEBサイトを公開していますので、ご覧ください。

■荻野吟子顕彰施策への期待

金子兜太句碑

2011年3月に金子兜太句碑が、荻野吟子生誕の地（記念館脇）に建ちました。
「荻野吟子の　生命とありぬ　冬の利根」
句碑の説明を「熊谷句碑物語」の中から引用させていただきました。
『この句は、数々の困難を克服して日本公許女医第1号となった荻野吟子女史と生誕の地である俵瀬を流れる利根川に着目し、冬になると寒冷な「赤城おろし」が吹き下ろす風景を描いたものです。利根川の広大な流れとともに吟子女史の生命が育まれ、人生の苦難を乗り越える原動力となったことが偲ばれます。そして、冬の利根には、吟子女史の不屈の精神と大いなる愛が息づいていることを感じさせてくれます。』
・参考資料　熊谷句碑物語（2018年8月19日刊）熊谷学ラボラトリー・熊谷句碑研究会発行

荻野吟子記念館

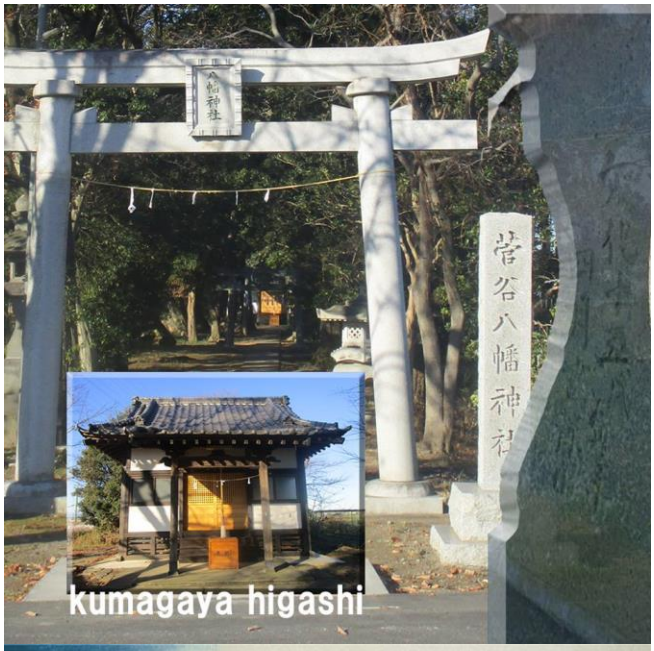
2018年6月の市議会で、荻野吟子記念館が、指定管理者制度の対象施設になることが決定しました。
指定管理者制度とは、文化会館、体育館、図書館などの公共施設を民間事業者へ管理運営委託し、経費の効率化を図り、民間の活力を導入する制度です。
民間活力を導入して、単なる施設の管理だけではなく、幅広い顕彰施策に力が入れられ、荻野吟子の生きざまを継承する活動が期待されます。

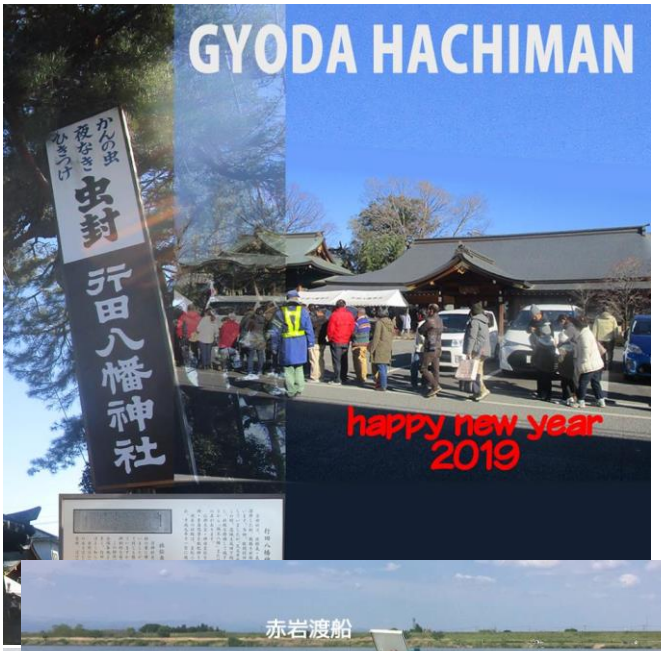
■千代田町との連携

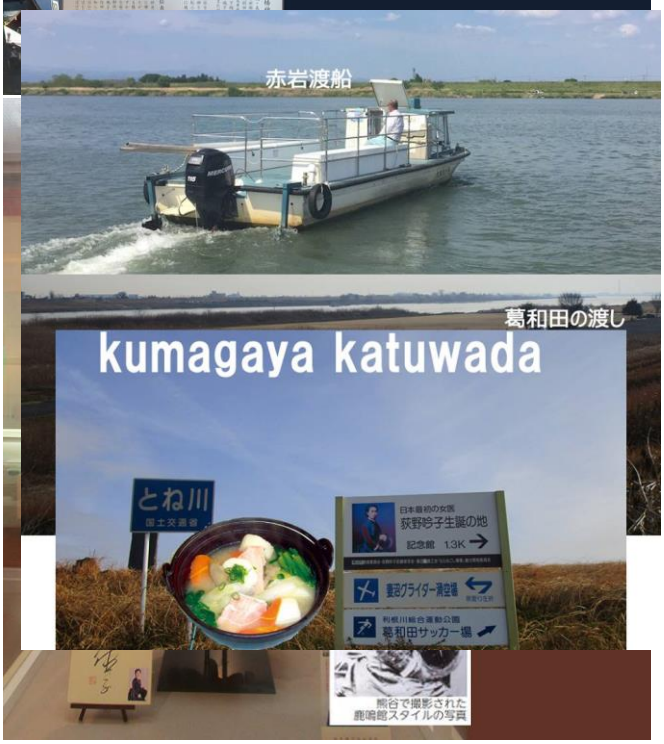
利根川から対岸千代田町を望む（2018.11.2撮影）

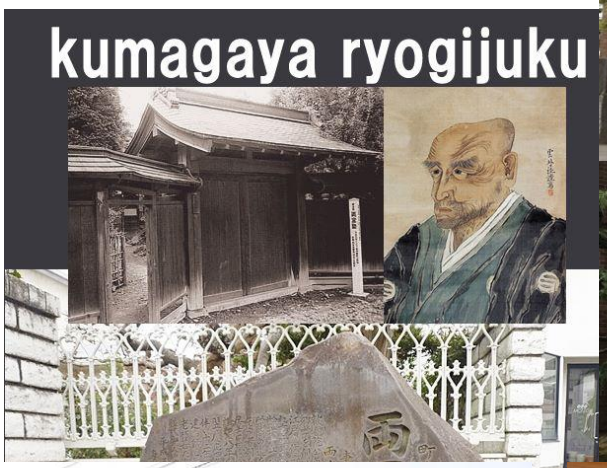
熊谷市WEBサイトの「荻野吟子記念館」の案内があります。
その中に、周辺散策モデルコースが紹介されています。
・熊谷駅～バス停土手上～荻野吟子記念館～渡船場～赤岩渡船場～千代田町 光恩寺～赤岩渡船場～葛和田渡船場～熊谷駅
この案内図には「葛和田渡船場」と名前が記載されています。
前号（熊谷市葛和田と千代田町赤岩を結ぶ渡し船）で記したとおり、利根川土手上、渡船場待合場所に「葛和田河岸・葛和田渡船場」の表示物がありません。埼玉県・熊谷市は、早急に改善すべき事項です。
荻野吟子も葛和田河岸・葛和田渡船場から利根川の風景をなんども見ながら、若い時代を過ごしたのではないでしょうか。
千代田町の光恩寺には、荻野家の長屋門が移築されています。内部には荻野吟子の資料展示がされています。
今回の映画制作を機に、千代田町においても荻野吟子顕彰施策が盛り上がることが期待されます。

熊谷市一場面春。2019.01-

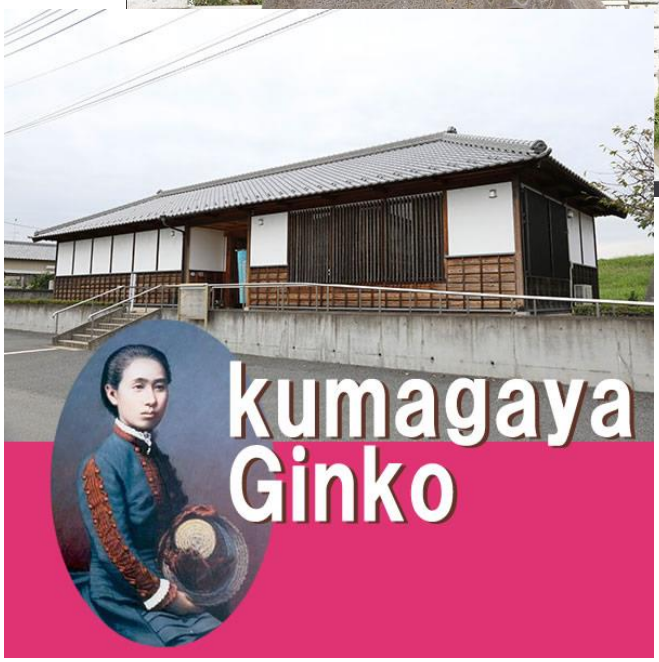







kumagaya ryogijuku

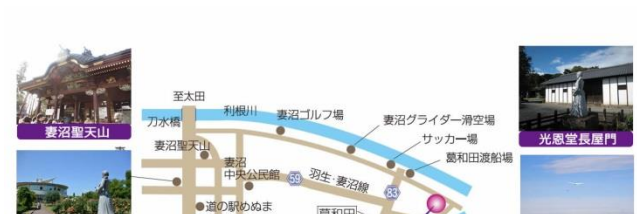
坂田医院旧診療所
kumagayaSakata


kumagaya
Ginko

記念館入り口
田中かく宛の手紙（複製）
入口スロープ
休憩室
生誕之地史跡公園

イントロ　　建物入り口

荻野吟子展示室
展示室


妻沼聖天山
至太田
利根川
妻沼ゴルフ場
妻沼グライダー滑空場
万水橋
サッカー場
葛和田渡船場
妻沼聖天山
妻沼
中央公民館
羽生・妻沼線
道の駅めぬま
光恩堂長屋門

展示室　アクセス